

『いほでしのぶ』 右大将の手紙

—— 選択される通世とその結末 ——

毛利香奈子

「キーワード ①『いほでしのぶ』 ②右大将 ③宰相中将 ④通世 ⑤手紙／手習」

一、はじめに

中世王朝物語『いほでしのぶ』は、その冒頭から手紙が多く登場し、それらの手紙が物語の展開に深くかかわっている。作品前半において手紙は、「まこと」が記されるものとして扱われる傾向がある。加えて、一品宮と内大臣の間で交わされる手紙は、二人の意思疎通が機能不全に陥っていたことを浮き彫りにしている。その二人の「仲だち」の役割を担った二位中将が、内大臣の手紙に書かれた「まこと」を自ら体現することで、それを物語世界全体の「まこと」として昇華させているのが、作品前半の特徴である。二位中将の手紙とのかかわり方は、先行作品には類を見ない部分があるが、女君が受け取った手紙を男君が見たがる、男君が見ることで一悶着あり、女君はますます手紙や手習を隠す、といったやりとりは、先行作品の手紙の様に共通するものである。ところが、作品後半の手紙には、前

半とはまた違った性質が見られるのだ。

本作後半の流れをおおまかに述べておく。^{注2} 中心人物となる右大将は、物語前半の主要人物である二位中将と前斎院の間に生まれ、母の死後は一品宮のもとで育てられた男君である。姉弟のように共に育った二品宮を密かに想うも、彼女は父二位中将に降嫁する。妻である女四の宮は異母兄の左大将と密通し、男子を出産する。右大将は叶わぬ恋と、他人の子を実子として育てる生き方への物思いを深めて出家を望み、異母姉中宮に恋する宰相中将と共に吉野へ旅立つ。

作品後半の重要な局面にも手紙が登場する。しかし、本作の巻三以降が抜き書きの状態でしか残されていないことを差し引いても、第三世代が展開の中心となる巻六以降は手紙の数が少ない。要因のひとつとして考えられるのは、中心人物である右大将が、その物思いを全て自分の胸一つにおさめてしまっていることだろう。少ない手紙の中で、展開に深くかかわるのは三

通である。ひとつは宰相中将に発見される右大将の手習、もうひとつは二品宮に宛てた右大将の手紙である。さらにもう一通、手紙の文面自体は叙述されないが、右大将が吉野へ向かう前日に宰相中将宛に出した手紙の存在も重要だ。二品宮への許されない恋に悩み、遺児を残して通世するという設定から、右大将の手紙には『源氏物語』橋姫巻で薫に渡される柏木の文殻が想起されるが、本作後半の手紙には、それとは異なる役割や性質もあると考えられる。右大将が宰相中将と連れ立って吉野へ向かっていく結末には、作品前半の王朝物語然とした展開とは異なる、いわゆる中世の物語らしさが前面に出ている。その展開に向かうにあたり、王朝物語で多用された手紙も、機能の変化を余儀なくされたものと思われる。本稿では、右大将に深くかわる三つの手紙の分析を通して、本作後半部の右大将物語の特性を明らかにしていきたい。

二、発見される手習―曖昧な物思い

右大将物語において、展開に大きく寄与するひとつめの手紙は、書き汚され隠された右大将の手習である。本作全体では、隠されたり、書き汚されたりした手習や手紙が三通、第三者に露見している。それぞれを比較し、その中で右大将の手習がどのような性質を持つているのかを明らかにしたい。以下、本文を引用し、重要な箇所を傍線を引いた。

本文1 内大臣、嵯峨帝の手紙に書かれた一品官の手習を見

つける (巻一―五九、六〇)

…女宮(二品宮)は、御手習ひし給ひつつ添ひ臥させ給へるが、御覧じつけて、御硯の下へ押し入れ給ふを、(内大臣)「かやうのことまでもなど。さればうちとけず思さるるな。さもつきせず見ま憂きものに思されたるものかな」とて見奉り給へば、いたううつくしき御まみのわたりのぬれたるは、泣かせ給うけるにやと覚ゆるに、この御手習ひいとどゆかしうなりて取りて見給へば、内裏よりの御文なりけり。(嵯峨帝)「つきせぬいぶせさ」など書かせ給ひて、

(嵯峨帝)「思ひきや雲居に月の影たえて霞の遠方をながむべしとは

さりとても、なにかあながちに思したえたる」

などあるかたはらに、黒う書きけがされたるを、しひて見給へば、

(一品宮)「涙のみ霞の遠方にふりまがひ光も見えず夜半の月かげ

嘆きわび憂かりし夢のうちにだに消えなばかかるもの

は思はじ

かくても経ぬる」など書かれたるをうち見給ふ。

本文2 内大臣の死後、手習が発見される(巻三―二二三)

手習ひし給へりけるにや、白き色紙にも書かれたるが、何となうひきしろひ入れたるさまにて、押し入れられたる

を、とり出でて見給ふは、

(内大臣)「一筋に燃えん煙の果てをだになほ雨雲の
よそにやは見ん

うたた寝の長き契りとなり果てばかりてや親のものを
思はん

半ば泉に帰る」など、何となき古言を、同じ上に、書きけ
がし給へり。

(内大臣) 帰るべき憂き瀬もかなし同じ世に見しは昔
の夢をしのびて

さばかりならぬことだに、「老の涙は一度故人の文にこそそ
く」とか言ひ置きたるを、まして、これを見給はん御心の
中ども、いかがはなのめならん。二所(両親)の中に置き
て、泣きこがれ給ふ。

本文3 宰相中将、右大将の手習を発見する

(巻八一三二八、三二九)

…客人の君(宰相中将)も、やがて帰り給はんとするに、
手習ひ給へりけるものを、入りおはしつるすなはち、文机
のあなたに押し隠いて、何となく出でんとし給へば、せち
に隠し給へるゆかしさに、引き返しつづ取り出でて、さす
がるにや、「これはいかに」とばかり、遠らかに見せき
こえ給ひつづ、急ぎ帰り給ふに、誰も紛らはしき御心地に
て、いたくも見入れ給はざりけるを、もておはして、急ぎ
灯のもとにて見給へば、さるべき反古などにもあらざりけ

り。皆、我が御手習ひにて、

(右大将) 幾年の秋も嘆きの色見えでつひに朽ちなん
こともはかなし

そむかばやと思へばさすがあはれなり捨つる身惜しき
この世ならねど

「憂きこそまされみ吉野の」などやうなる古言、多く書き
けがされて、

(右大将) 何か憂き思ひしとげば世の中をいとはぬほ
どの住みかなりけり

ただ同じさまなることを、さまざま書き給へるを、つくづ
く見給ふままに、…

本文1は、嵯峨帝からの手紙に書きつけた、内裏を郷愁する一
品宮の手習が、内大臣に露見する場面である。本文2は生前内
大臣が死期を悟って記した手習を、両親が発見する場面である。
ちなみにこの手習は、二位中将の手に渡り、一品宮のもとに届
けられることになる。本文3は、右大将邸を訪れていた宰相中
将が、出家を志向する右大将の手習を發見して、持ち帰る場面
である。それぞれの傍線部のように、硯や机に押し入れて隠さ
れたものが、第三者によって發見され、読まれている点が共通
している。また、それぞれの点線部にあるように、「書きけが」
されており、手習を書いた者にとつて、露見したくない内容が
記されていると捉えられる。本文2は内大臣が死去しているた
め判断が難しいが、本文1の一品宮は、手習の内容について内

大臣になじられた際に「見せ奉らじと思ひつるものを（巻一六二）」という気持ちになっており、本文3の右大将も「ねたうも見つけられてけるかな（巻八―三三二）」と、露見したことを悔いている。そもそも和歌は、独詠歌ではなく、手習歌として書くことよって「伝達性」という特質が生まれるものである。^{注3}他者に伝達される危険を冒してまでも敢えて書き記し、それを塗りつぶすという方法をとったところに、『源氏物語』の浮舟のような自己の内面や無意識の表出^{注4}を試行した痕跡が見える。三つの発見される手習は、先行作品と同様の機能を有しているように捉えられる。

一方で、作品後半に登場する本文3の右大将の手習には、他とは少々異なる部分もある。まず、宰相中将が右大将の手習を見ている点である。宰相中将本人も「さるべき反古」だと考えていたように、男君同士で手習や手紙を見る場合に対象となるものの多くは、女君からの手紙である。たとえば『うつほ物語』内侍のかみ巻では、正頼と兼雅が、文通相手の女君たちの手紙を見せ合い、比べている。『源氏物語』帚木巻でも、頭中将が見たがるのは源氏の手元にある女君からの「待ち顔ならむ夕暮れなど（帚木巻―五五）」の手紙である。宰相中将が右大将自身の手習を見つけたのは、先例から外れた展開だと言って良いだろう。次に注意したいのは、右大将の手習の内容である。手習のほとんどがそうであるように、生きることにへの憂いや嘆きが書かれている。右大将の場合は具体的に何に對しての、誰に對しての物思いなのか明確に示されていない

のが特徴である。本文1の一品宮の物思いは、降嫁後に置かれた自身の状況に対するもの、本文2の内大臣の物思いは、隔てられた一品宮に對してと、自身の死に落胆するであろう両親への罪悪感に對するものだとわかる。本文3の右大将の手習歌から、同じように物思いの対象を読み取ることが難しい。この曖昧模糊とした右大将の手習は、宰相中将が一度自邸に持ち帰ってから読まれることになる。発見後の取り扱いかにも、先行作品や本作内部の他の手習とは異なる性質が見受けられる。次節で詳しく検討する。

三、作り変えられる手習―贈答の創出

発見された右大将の手習を自邸に持ち帰った宰相中将は、書き汚されたその文面の解読を試みている。その過程を、本文を引用しながら確認する。

本文4 宰相中将、右大将は恋に悩んでいると予想する

（巻八―三一九）

（宰相中将）「心にかへてとか、さやうの道ならでは、さしも人の、身を捨つることもありがたきを、さこそは」

本文5 宰相中将、右大将の出家願望を読み取る

（巻八―三三〇）

（宰相中将）「：『色も見えぬ』とあるにも、身をも人もも顧るほどの心も強く、何ごとにつけても、濁りにしま

ず、さばかり惜しう、山の奥まで思ひ入り給ふめるに、…」

本文4で宰相中将は、右大将の手習に記された「心にかへて」という文言から引歌に思い至り、右大将の物思いの原因は恋だと、点線部のように予想している。本文5でも、「色も見えぬ」という文言から、何事にも流されない心の持ち主である右大将が山入りを望んでいることに思いを巡らせている。書き汚されて見えにくくなった文字を解読し、そこに込められた右大将の思いを読み取るこの行為は、いわば宰相中将による手習の解釈だと言っていいだろう。対象が曖昧だった右大将の物思いは、宰相中将の解釈を通じて明確になっていく。そのため、宰相中将も「されど、さしも我が思ふ未ばかり、行く方知らずなどはあるべきことならず。(巻八一三三〇)」と、自身と右大将の物思いを比較し、右大将の深い苦悩を理解できたと考えているのである。たとえその解釈が、宰相中将の思い込みによるもので、右大将の真意とは乖離していたとしてもである。右大将の手習に凝縮された思いを独自に読み取った宰相中将は、手習歌への返歌をしたためている。男君の手習や手紙を解読し、自分の詠歌につなげる行為は、巻三の二位中将にも見られる行為であった。二つの場面を比較してみる。

本文6

二位中将、内大臣の手紙に歌を書きつける

(巻三二二〇〇—二二〇二)

(内大臣) 重ねても藤の袂の露ぞ憂きたのめし言の葉さ

へしをれて

筆にまかせて、やすやすと書きなし給へる、えも言はずめでたきを、うち返し見給ひて、(二位中将)「いつもの心鈍さに、しれごとをもつかうまつりけるかな。されど、内外はゆるさるべき身なれば、苦しかるまじ」とて、ほほ笑みてうち置き給ふ。

心の乱れまさり給ふも、折ふしといひ、いかばかり罪得らんと思ふも心憂く、涙ぞほろほるとこぼれぬる。

(二位中将) せき返し包む涙の色までも藤の袂の露に漏りけり

ありつる文の、かたはらに書き付けて、さし寄せ給へる。

本文7

宰相中将、右大将の手習に返事を書く

(巻八一三三〇、三三二)

(宰相中将)「いとふべき憂き世の中といひながらしはしな捨てそ人もこそよれ

げに、なかなかなるべき御ことかなと思ひ給ふるも、いとこそかたはらいたく侍れ。さるは、

恋の道踏みなれてける君住まば我が身後れじ山の奥まで

あなかしこ

と書きて、御手習ひの物具して、返し奉り給へるを、…

本文6では、一品宮と引き離された内大臣が、喪服と涙に仮

託して一品宮への思いを綴っている。それを「うち返し見」た二位中将は、傍線部のように同じ歌意の詠歌を内大臣の手紙の「かたはらに書き付けて」、一品宮に見せようとしていることがわかる。同じ紙に、同じ内容の歌を書き付けているのである。

一方、本文7の宰相中将の歌は、右大将の手習歌「何か憂き思ひしとげば世の中をいとはぬほどの住みかなりけり（巻八一三一九）」や、古言「憂きこそまさされみ吉野の（巻八一三一九）」を受けて、出家に同行したい旨を表明するものになっている。

同じ内容の歌の繰り返しではなく、右大将の手習歌への返歌である。また点線部に「御手習ひの物具して」とあるように、右大将の手習とは別の紙に記されていることがわかる。二位中将の場合とは異なり、内容でも形態でも贈答として成立している。返事を必要としていなかった右大将の手習は、宰相中将の解釈と返歌によって、贈答に作り変えられたと言えよう。その贈答からは、悲恋遁世の物語の筋書きが読み取れるようになっていく点が重要である。

ちなみに、男女間においては、女君が書いた手習が図らずも男君に伝達され、返歌として認識されることが多く見受けられる。男君同士の例としては、『狭衣物語』巻三で、狭衣大将と宮の中将が、同じ扇に歌と絵を交互に書き付ける箇所が挙げられる。井上眞弓は当該箇所について「これらすべての和歌は、書き付けという形で和歌贈答の形をなしていた。：（中略）：扇に書き込まれた架空のことが現実をたぐり寄せ、現実そのままではないものの恋のシナリオが書き留められているかのよう

な体裁となっていた。」とし、二人の手によって「現実とは異なるもう一つの世界」が作られると指摘する。『いはでしのぶ』の場合、宰相中将が組み立てた筋書きを後から見せられた右大将が、宰相中将の創出した贈答歌の世界に飲み込まれたように捉えられよう。一方的な解釈をもとに作られた贈答が送り返られてきたために、右大将は「藻塩草筆のすさみの古言をかくと我が身に積もるべきかは（巻八一三二二）」と、宰相中将から示された悲恋遁世の筋書きを否定しているのである。ところが、宰相中将は右大将の否定をもととせず、「みづから渡りつつ、まめやかに泣く泣くといふばかり、聞こえ給ふことどもあるを：（巻八一三二二）」といった様子で、出家の同行を諦めようとしなない。右大将は自ら書いた手習と、それを解釈した宰相中将の返歌によって創出された贈答歌の世界を一度は拒否した。しかし、引き下がらない宰相中将の存在と共に、贈答歌の世界を自身の中から完全に排除することができなくなっていくのである。宰相中将が右大将にとっていかなる存在なのかという点について、次節では手紙から少し離れて検討する。

四、生き方の選択―左大将への反発、宰相中将への共感

巻八冒頭の右大将の様子は、「憂きに面馴れ行く世の中を、いとひ給ふ（巻八一三二六）」とされ、三年以上の年月を憂鬱に過ごしていることが示される。様々な物思いを抱える右大将は、前節で取り上げた手習の露見を境に、出家の意志を固めていくことになる。右大将が出家という選択に至った背景を読み

取れるのが、右大将と宰相中将および左大将の遭遇場面である。注目したいのは三人の男君の関係性である。

宰相中将は作中で初めて登場した際も、右大将に左大将と見間違えられている。そして右大将は左大将を忌避し、宰相中将と会うことは「心はのどまりて（巻六一二九〇）」と歓迎している。その三人が、秘めた恋を話題にして、それぞれ戯れている箇所がある。まずその場面の本文を引用し、両者に対する右大将の態度や言動の違いを確認する。

本文8 左大将に秘めた恋を言い当てられる右大将

（巻七一三〇八、三〇九）

（右大将）色深き心慣らひの言の葉か忍_ニ緜_ニ摺_ニ知らぬ我が身に

言ひ当てられぬる心地はし給へど、つれなげに言ひなすを、
大将（左大将）もうち笑ひつつ、例の何かとおとしめきこえ給ふ。

本文9 宰相中将に秘めた恋を言い当てられる右大将

（巻八一三一七、三二一八）

…言ひ当てられぬる御心地、少しをかしようぞあるや。
（右大将）おほかたにながむる秋の夕べをも心にかへてあやしとや見る

などのたまふを、尽きせずおとしめきこえ、かたみにのたまふほどに、…

本文8は宿直所に居合わせた右大将と左大将が戯れる場面で、二品宮への秘めた恋心を言い当てられた右大将が、左大将に応答している。右大将は点線部のようにつれない様子で「忍_ニ緜_ニ摺_ニ知らぬ」と応じ、恋心を否定している。それに対して、同じ話題で宰相中将と戯れる本文9の右大将は、点線部のように恋の物思いを「おほかた」のものにすりかえているものの、恋心については否定していない。言い当てられたことについても、宰相中将の場合のみ「をかしようぞあるや」と感じており、左大将に対する右大将の態度の違いを生んでいる。また、交わされる戯れの言葉にも違いがある。本文8の左大将との場合では、「例の何かとおとしめきこえ給ふ」と、左大将から一方的に蔑まれている。「例の」とあることから、二人は日常的に、左大将が右大将を下に見るような関係であったと考えられる。本文9の宰相中将との場合は、「尽きせずおとしめきこえ、かたみにのたまふほどに」とあることから、二人で互いに蔑み合っていると思えることができる。右大将に敬語が多く用いられているものの、二人は対等な関係で会話をし、戯れていたと言えよう。以上のことから、少なくとも右大将の中では、左大将と宰相中将とで、態度を分けて接していると考えられる。これを踏まえて、出家を決意する直前の右大将が、宮中で左大将と宰相中将をそれぞれ目撃する場面に話を戻したい。

本文10

右大将、宮中で宰相中将と左大将を目撃する

…(宰相中将が)藤壺わたりへ紛れ寄りぬるを、大将(右大将)、やをら立ち聞き給へば、ただ戸口のもとにて、中納言(の君)とぞ語らふなる。何とやらん、言の葉は聞こえぬものから、うち泣きつつ、立ち出でなどするなるべし。

(宰相中将)「見るたびに憂しとな言ひそいつまでか同じ雲居の有明の月

今思し合はせよ。あはれ、げにはかなき思ひ出もなくて、過し給へぬるものかな」と、のたまふれば、

(中納言の君)雲居までかくる心を憂しとてもなほ有明の世をこそは見ぬ

と、言ふなれば、(宰相中将)「ありがたの御情けや」とて、うち笑ふ気色にて出づるを、さし出でまほしくて、(右大将は宰相中将を)引きとめんと思すほどに、左大将おはすれば、何となくただずみのき給ひて、後涼殿におはしざまにおはすれば、…

右大将が宮中でまず目にするのは、宰相中将である。密かに想いを寄せる中宮の局を訪れ、取り次ぎをしていた中納言の君に対して、叶わぬ恋の辛さと出家の意向をほのめかす発言をしている。右大将はかすかにそのやり取りを耳にし、本文10傍線部のように宰相中将を「さし出でまほしくて、引きとめんと思す」という心境になっている。秘めた恋に望みを失い出家を志すのは、右大将の手習が露見した際に、宰相中将が創出した贈

答で示された筋書きそのものであった。右大将は、一度は拒否した悲恋通世の物語に、自らかかりを持つとする姿勢を見せているのである。それを可能にしたのは、本文10の場面にあるような、悩める宰相中将に対する、右大将の共感である。しかし、宰相中将に共感し、彼を引き止めようとした右大将の行動は、点線部の左大将の出現により阻まれることになる。右大将はこれまでと同様に、左大将との遭遇を忌避し、宰相中将をも避けてしまう。

右大将が異母兄左大将を忌避する理由には、父二位中将の後継者問題がかかわっている。二位中将は右大将を鍾愛するが、世間一般には二人は「なずらひなる際だになければ(冷泉本巻四—三八三)」とされ、同様に賛美される。二人の間の明確な差といえ、母が健在で、先に生まれた左大将が、後継者として優位にある点である。この埋められない差を詰めて、右大将が二中将の後継者となるためには、左大将と同等になるだけでは足りない。右大将が左大将を避けるのは、左大将に「似ること」なく、差異によって彼を超えようとするためだと考えられる。右大将にとって異母兄左大将は「艶なる大将(巻七一—一〇)」であり、愛欲のままに自分の妻である女四の宮と密通し、子まで成した存在である。対の姫君という妻を持ち、女四の宮と通じながら、さらに新中納言典侍に言い寄っていることも本文から読み取れる。二品宮への想いをひた隠しにし、妻の密通を黙認する右大将にとってみれば、自分とは正反対の奔放な男君ということになる。ところが、これまで左大将を意識しつ

つも目を背け、その対極を生きてきた右大将は、本文10の直後、いわゆる「艶なる大将」のような行動に出るのである。

本文11 右大将、宮中で新大納言の君と契る

(巻八一三二三)

…ながめ入り給へる月影の(右大将の)御姿、言ふよしもなくなまめかしきに、過ごしがたうやあらん、聞こえ出だしたる人あり。

(新大納言の君) 数ならぬ我から曇る日影かと思へば
牙ゆる袖もありけり

艶によしある気色なるは、誰ばかりぞと、おほつかなき御心添ひぬ。

(右大将) 九重を照らす日影の霜氷いざうちとけて袖を重ねん

声する方に寄りゐて、御簾を引き上げ給へるに、さまでは、思はざりけれど、かかやかしく引き入りなどもせず、奥さまに向きて、紛らはしつゝたる後手など、そびやかにをかしきさまなり。

後涼殿に移動した右大将は本文11傍線部のように、歌を読みかけてくる新大納言の君に興味を持ち、局の中に入り込み親しく語らう。即物的なこの行動は、これまでの右大将には見られないものである。寧ろ、直前に目撃した左大将にこそありがちな行動だと言えるだろう。これをきつかけに、右大将が左大将

のような奔放さを發揮して、複数の女君と関係を結ぶことになれば、出家を実行に移さなかつたとも考えられるが、そうならない。この新大納言の君が、先行して出家していた嵯峨帝の召人だつたと判明^{注8}し、出家のイメージがちらついたのである。右大将はそれをきつかけにして、生来掲げてきた左大将とは異なる生き方に引き戻されたとも考えられよう。

こうして右大将は、叶わぬ恋を嘆き出家を志すという、宰相中將が提示した筋書きを、彼と同じように歩むことになるのである。二品宮に想いを告げた際も、「(二品宮が)からうじてのたまひ出でたるをだに、聞きさすやうにて、立ち別れ給ひにしの後の：(巻八一三二五)」と叙述されるように、二品宮の応答を聞くことなく立ち去る右大将の姿は、最初から恋を諦めているかのようでもある。それも、右大将が左大将ではなく、宰相中將の生き方を選択したためだと考えられる。

五、残される物語と右大将の救済

―置き去りの悲恋遁世譚

これまで考察してきたように、手習の露見を契機として、右大将は宰相中將に領導されるように、出家遁世という結末へと向かつていく。左大将への反発と宰相中將への共感により、右大将は出家への歩みを進めるのである。周囲に翻弄されて出家することになったかに見える右大将が、吉野への旅立ちをどのように捉えていたかを分析することで、本作が悲恋遁世譚をなぞりながら、いかなる物語の締めくくりを目指したかが見えて

くるのではないか。そこで注目したいのは、吉野へ向かう直前に右大将が残す、ふたつの手紙である。それぞれ本文を確認していく。

本文12

右大将、二品宮宛の手紙に忍草の君について書く

(巻八―三三八、三三九)

…(新二位中将が)うちうなづきて聞き給へる顔つきなどの、うつくしうらうたげさ、姫君たちにも、ややまさり給へるなり。大臣(二位中将)に、つゆも違ひ給はぬものから、ありつる火影の御さまも、いとよう覚え給へるを、見給ふにつけても、思ひ閉ぢむる心もさすがなるままに、昼より書き尽くし給へりける文の上包みに、書き添へ給ふ。

(右大将)捨て果つる憂きに心の立ち返りまた面影を

何に見つらん

露かけてあはれ忘るな忍ぶ草しのばれぬ身の形見なり

とも

こまかなりつる中にも、こもりぬれど、筆の頼り及ばず、このことのみ、返す返す書かれ給ふも、まことに捨てがたかるべきわざかなと、みづから思し知られつつ、…

ひとつめの手紙は、右大将と二品宮の取り次ぎをしていた中務宮という女房に渡されている。「昼より書き尽くし給へりける文」とされており、単なる消息ではないことが示される。そこに繰り返し書かれる内容は「忍ぶ草」、つまり右大将が新中

納言典侍との間にもうけた娘忍草の君のことである。受取人である二品宮への想いについても上包みに触れられている。叶わない恋と親子の縁という、典型的な通世譚の筋書きが手紙には記されていると考えられる。また、二品宮宛のこの手紙について右大将は、「今さら、かひあらん一筆を、待ち見んものとは思はず(巻八―三四〇)」と発言しており、必ず届けて欲しいとしつつも返事を求めていることがわかる。つまり、二品宮への悲恋を端緒とする、物思い多き右大将の半生が記され、閉じられたのがこの手紙である。右大将の遺書だと言っている。この手紙を書き上げる直前の右大将が、半生を振り返るように、ゆかりの深い人物のもとを訪れているのも示唆的である。

ちなみに、右大将は出家前に笛も残している。相手は、本文12で「大臣(二位中将)に、つゆも違ひ給はぬもの」とされた、異母弟新二位中将である。右大将は遺愛の笛を新二位中将に譲り、「(右大将を)思し出でん折は、吹きて遊び給へ(巻八―三七七)」と言いつ残している。その際、新二位中将が「久しく笛も吹き合はせ給はねば、わびしき心地なんしつる(巻八―三三六)」と言っており、右大将は以前から、笛の奏法を新二位中将に伝えていたと考えられる。右大将の笛の譲渡は、父二位中将の後継者の地位をも譲ることの表れであり、新二位中将の存在は右大将に出家を決意させるひとつの要因にもなっているが、本稿では詳しく考察しない。右大将が「音の限り」吹く笛は、聴衆に「さまざま、昔のあはれ(巻八―三三二)」を思い出さ

せるものであった。『源氏物語』宿木巻で、薫が柏木の笛を「音の限り」奏できるように、新二位中将もまた右大将の笛を同じ方法で奏するだろう。右大将出家後、彼の物語を再生し伝えていくのは、手紙ではなく、新二位中将が奏法と共に継承した笛だとも考えられるのではないか。本作における笛の相伝については、『源氏物語』横笛巻、『狭衣物語』の影響も見出すことができ、注目される。別稿にて論じることとしたい。

右大将は、自身が生きてきた悲恋遁世譚を二品宮宛の手紙に封じ、それを都に置き去りにしている。これまで生きてきた筋書きを捨てた右大将は、これ以降どんな物語を生きるのか。右大将は吉野に向かう直前、さらにもう一通手紙を書いている。本作最後の手紙がどう扱われたかという点から、右大将が最後に選んだ筋書きを読み解いていきたい。

本文13

右大将、山のふもとで宰相中将に再会する

(巻八一三四四)

…高きより遠方の山もとに、人影のするを、誰ぞと寄
て見給ふに、やがて御袖をひかへつつ、

(宰相中将) 契れどもさばかりこそはいとひしを慕ふ
心も浅からぬかな

と、言ひかくるは、権中納言(宰相中将)なりける。(右
大将)「あな恐ろし」とて、

(右大将) なほざりに世の言種と思ひしに今こそ深き
心をも知れ

昨日の消息に、かすめたりし筋を、よく心得けるもかし
う、まことにいかなる山の奥までも、我が身の際に等しく、
同じ心なるべき人ばかり、嬉しかるべき友にやはあらぬ。
誰も都に慣れしその頃は、親同胞に過ぎて、むつまじうも
思はざりしを、かうまで深かりける契りのほど、あはれさ、
なのめにや思し知られん。

右大将は吉野へ向かう前日、宰相中将に手紙を出していたこと
が傍線部からわかる。「かすめたりし筋」とは、明日出家する
とほのめかしたということだ。それはかつて、右大将の手習が
露見した際に宰相中将から提示された、共に出家するという筋
書きを可能にする連絡である。左大将のような「艶なる大将」
としての生き方に反発し、物思い多き半生を悲恋遁世譚として
遺書に封じて残した右大将が、最後に求めた物語は、宰相中将
との出家だった。注意したいのは、右大将に出家を決意させた、
二品宮や女四の宮について、当該場面では全く触れられていな
い点である。右大将にとって出家が止むを得ない辛い選択であ
れば、少なからずその原因を思い出すだろう。しかし、右大将
がしきりに考えているのは、宰相中将との「深かりける契り」
であり、そこに悲壮感はない。悲恋遁世譚を記した自身の手紙
を都に置いてきた右大将にとって、吉野への出家という筋書き
は、いわゆる悲しい選択とは違う意味を帯びたものなのである。
右大将にとって出家がどんな選択だったのかは、吉野に向かう
直前、伏見に立ち寄る場面から読み取れる。

伏見といえ、実母前齋院が住み、右大将が生まれた土地である。人氣のなくなつた伏見の母の墓前で、右大将は「何の憂へもかなしびも、聞こえ合はする方なく、答ふるものとは、むなしき風の音ばかりにて、…(巻八一三四三)」と、自身の孤独を嘆いている。生後間もなく母を亡くし、宮中で育つも、

途中でそこから引き離された右大将にとって、故郷と言える土地や人物は無いも同然である。埋まらない孤独は、悲恋や挫折よりもっと根本的な、右大将の物思いの源だったと言えよう。伏見で改めて孤独を反芻した右大将は、その後再会した宰相中将を、本文13傍線部のように「同じ心なるべき人」嬉しかるべき友」だと認識している。それは「深かりける契り」によるもので、親兄弟とのつながりより深いものだという。生来孤独を運命付けられた右大将が、その孤独から解放されたのが、吉野へ向かう本作最後の場面なのである。右大将が選択した出家という結末は、彼を孤独の苦しみから救済しようとしている。それゆえに右大将は、遁世直前の場面において右大将は、これまでの苦悩や現世への未練を前面に出していないのだと考えられる。

右大将が悲恋遁世譚を置き去りにしてきた都の中で、この結末を知る者はいない。同じ心を持ち、同じ筋書きの物語を共有し、語らいながら連れ立って吉野へ向かう、右大将と宰相中将だけが知る物語が、ここから始まるのである。あたかも隠された手習のように、右大将物語は二人によって吉野に運ばれ、その先は描かれない。「あはれなることにこそ、その頃は聞き侍

りけめ(巻八一三四五)」と記される本作の末尾は、手紙と宰相中将の存在によって、右大将救済の物語の幕開けをほのめかつつ閉じられているのである。

六、おわりに

『いほでしのぶ』後半の物語は、右大将が三つの手紙を介して、自身の物語を選び取るように展開していると捉えることができる。右大将の選択は宰相中将に領導されたものであり、宰相中将が唐突に物語に登場するのも、右大将を出家という結末に導く存在であつたからだと考えられる。また、右大将によって選択された結末は、悲恋遁世譚と見せかけて、その筋書きは手紙と都の中に置き去りにされている。代わりに右大将は、長らく抱えていた孤独から救済されるかのような結末を迎えており、それは悲恋遁世譚とは異なる、新たな物語のはじまりとも捉えられる。このように、手紙と宰相中将が示す本作の結末は、中世の遁世譚とも異なる性質を有している。王朝物語においてもこのような展開を辿るものは珍しく、本作の特徴のひとつであると言えよう。物語前半で手紙によって作られた一品宮を中心とする世界は、都にそのまま残され、その世界から外れた右大将は、作品後半の手紙によって救済され、新たな物語世界へと旅立った。手紙というひとつのモチーフを介して、異なる価値観を持つ物語世界を構築している点は重要である。本作の巻三以降の本文は抜き書きしか残されていないことが悔やまれる。本作前半で成立する一品宮を中心とした物語世界は、彼女を

「美と相似の基準」として賛美することで作られていく。^{注13} 誰もが認める普遍かつ最良の世界として、先行作品をさまざまに取り入れながら描かれる本作の根底には、かつての王朝への憧憬があるものと考えられる。一方、物語後半では、その一品宮中心世界の論理から外れた人物の生き方にも注目し、彼らを放逐したり救済したりすることで、個別の物語を描いているのも本作の特徴である。普遍的でも全体的でもないものに価値を見出したところが、中世という激動の時代における王朝物語という存在そのものと共鳴しているようでもある。新二位中将の笛の音により思い出される昔や、偶発的に発見される手習のように、時を超えた先で、その価値を認められる日を見据えて編まれたのが、『いはでしのぶ』という作品なのではないか。

注

- 1 作品前半の手紙の機能については、拙稿『いはでしのぶ』における手紙―「仲だち」としての二位中将―(『学習院大学大学院日本語日本文学』14号、二〇一八年三月)にて論じた。
- 2 本作の登場人物は時期により呼称が変化するが、本稿では「内大臣・二位中将・一品宮・嵯峨院(嵯峨帝)・二品宮・中宮・右大将・左大将・宰相中将」に統一して記載することとする。二位中将の息子が「二位中将」として登場するが、便宜的に「新二位中将」とする。引用本文でもこれらの呼称を適宜補記している。
- 3 山田利博「手習歌の機能」(『源氏物語の構造研究』新典社、二〇〇四年)
- 4 浮舟の手習については、藤井貞和「物語における和歌―『源氏物語』浮舟の作歌をめぐる」(『源氏物語論』岩波書店、二〇〇一年)、後藤祥子「手習いの歌」(『講座源氏物語の世界第九集』有斐閣、一九八二年)など多くの先行研究がある。
- 5 前掲山田論文(注3)
- 6 井上真弓「書き付けから始まる〈恋〉―『狭衣物語』中将妹君の登場を読む」(『狭衣物語 文学の斜行』翰林書房、二〇一七年)
- 7 右大将と左大将の間にある「似ること」については、拙稿『いはでしのぶ』の右大将―揺らぐ「似ること」と遁世―(『学習院大学人文科学論集』第二十七号、二〇一八年十一月)にて論じた。
- 8 右大将は出会って間もなく、女君について「さは、院の御心とどめておはしまししも、ほどなくあらぬ世にならせ給ひぬれば、まことに偽りならず、さこそ心の中も、晴れ間なかるらめと、あはれにて…(巻八―三三三)」と新大納言の君を想定している。
- 9 横溝博『いはでしのぶ』右大将の「あはれなる事」について―二位中将への告別の場面をめぐる―(『平安文学の風貌』武蔵野書院、二〇〇三年)でも、新二位中将の出現が出家を決意させたことが指摘されている。

10

『源氏物語』宿木巻における薫の笛の演奏は、以下のよう
に叙述されている。

笛は、かの夢に伝へし、いにしへの形見のを、また
なきものの音なりととめてさせたまひければ、このを
りのきよらより、または、いつかはえはええしきつ
でのあらむと思して、取り出たまへるなめり。大臣和
琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将(薫)の
御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹きたてたまひけ
る。(『新編日本古典文学全集』24―四八二)

また、柏木から薫への笛の相伝については、浅尾広良
「柏木遺愛の笛とその相承」(『研究講座源氏物語の視界
4』新典社、一九九七年)、小嶋菜温子「柏木の笛―幻
の血脈へ」(『源氏物語批評』有精堂出版、一九九九年)
などが詳しい。

11

足立蘭子「いはでしのぶ」(『中世王朝物語・御伽草子事
典』勉誠出版、二〇〇四年)では、互いの悲恋に共感し
あう右大将と宰相中将が吉野へ向かう結末は「彼らに
とって『皇女』の獲得そのものが本来問題ではないこと
を、逆説的に暴露している」と指摘している。本稿では
右大将を孤独から救済するための結末だと捉えた。

12

本作の結末ががいわゆる悲恋遁世譚とは性質を異にする
という指摘は、横溝博「『いはでしのぶ』の右大将遁世
譚の方法―『今とりかへばや』取りをめぐって―」(『国
語と国文学』第八十巻六号、二〇〇三年六月)にもある。

13

一品宮が物語世界の「美と相似の基準」となっているこ
とについては、拙稿「『いはでしのぶ』の碁と水―交差
する『源氏物語』『狭衣物語』―」(『日本文学』66巻9号、
二〇一七年九月)にて論じた。

(付記)

『いはでしのぶ』の本文引用は、『中世王朝物語全集4
いはでしのぶ』(笠間書院、二〇一七年)に依り、適宜
主語を補記し、傍線を引き、巻名と頁数を付した。中略
は…で示した。また、歴史的仮名遣いについて、小木喬
「いはでしのぶ物語 本文と研究」(笠間書院、一九七七
年)を参照した箇所がある。『源氏物語』の本文引用は、
『新編日本古典文学全集(小学館)』による
(もうり・かな) 博士後期課程)